



TITLE:

野田善郎先生の思い出

AUTHOR(S):

久保田, 信

CITATION:

久保田, 信. 野田善郎先生の思い出. 愛媛大学理学部設置50周年記念誌 --
さらなる飛躍へ(1968-2018) 2018: 356-357

ISSUE DATE:

2018

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/235661>

RIGHT:

発行元の許可を得て登録しています.

(生物学科)

野田善郎先生の想いで

生物学科第4回（昭和50年）卒業
京都大学フィールド科学教育研究センター
瀬戸臨海実験所准教授
久保田 信

早いもので、愛媛大学理学部50年史に寄稿してから、もう20年余り経過しました。私は生まれも育ちも松山で、愛媛県立松山東高校を卒業して、1971年から4年間理学部生物学科に在籍しておりました（図1）。自宅から自転車通学の毎日で、楽しく時間が過ぎ去りました。大学は天国ですね！

教養部で2年間お世話になってから残りの2年間は、白亜のまだ新しい理学部棟で専門課程を有意義に、素晴らしい諸先生方から学べました。同学年は14名でした（図2）。特に3回生でしっかりと学べた専門の講義と実習は今でも忘れがたく、微生物（細菌など）、細胞（組織切片づくりから電顕レベルまで）、染色体、植物やヒドラから魚類までの生理・生態・発生・形態・分類学などと多岐にわたっており、とても刺激的で、さすが大学ならではの生物学だと感動しました。衛生検査技師免許も取得のため人体解剖にも立ち会ったりしました……。小田深山での野外実習で初めて出会ったアカショウビンの美しい歌声と姿に

惚れ込みました。一方、倶楽部を3つかけもちし、大学生活を目いっぱい活動した思い出もひとしおで、クラブのことは、既に少しだけ寄稿致しました。

私は幼少の頃から三津浜の海辺で育ったので海洋生物との触れあいが多く、よく考えた末に、経験を生かした海洋生物の系統分類学的テーマを4回生の卒論としました。それ以降、現在に至る私のまっしぐらな人生の方向が決まったのですが、このことは冒頭で述べた50年史に記しています。

私は昨年65歳となり、退職寸前の今、この原稿を書いております。おりしも、「京都大学を去るにあたって」の一筆を書き終えたところです。この20年間ほどの間に、残念なことですが、教養部時代の指導教員だった野田善郎先生（沢田允明先生を指導教員にと思ったのですが、高校時代から同級生の沢田知夫君（図2左下、左上から二人目が小生）のお父様だったので遠慮してしまいました）、卒論の指導教員の伊藤猛夫先生が亡くなりました。ヒドラの研究で知られていた伊藤猛夫先生につきましては、同窓会誌に追悼文を寄稿させて頂きました。今回遅まきながら同窓会の重職もされておられた野田善郎先生についての幾つかのエピソードを寄稿させて頂きたいと思います。

私は26年前に現職についたのですが、その頃に、野田善郎先生は和歌山県白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所へコシダカウニの発生時期にあ



1975年（昭和50年）理学部卒業記念写真

わせて、毎年、来所されていました。「コシダカウニは小型のとても可愛い南方系のウニで、卵が透明で卵割が他のウニよりもよく見える素晴らしい特性をもった研究材料です」ということも教わりました。先生の発生の研究の様子をつぶさに拝見し、昔話に花が咲き、そんな中、野田先生は、いつもの穏やかな物腰で、「ウニの雌雄を外部形態からは普通は見分けられないけど、コシダカウニなら大体分かるのだよ」と見分け方を教えて下さったりしました……。高田裕美（現同窓会誌編集員）さんたち若い女学生もしばしば同行していました……。しかし、突然、亡くなってしまいました。

野田先生との忘れ得ぬ思い出の一つは、愛媛大学在学中、臨海実験所を活用し、野田先生がお得意のウニの発生を一部始終観察したことで、これは臨海実習の定番の一つなのです。でも、中島臨海実験所は卒業後に設置されたのでそこではなく、私達は宇佐にある高知大学の臨海実験所に行ったのです。ウニの発生観察中、私はアメフラシの紫汁を入れて、発生がどのように変化するかなどと密かに試して喜んでいました。宇佐は穏やかな瀬戸内海の中島や松山の手海とは非常に異なり、黒潮洗う太平洋に生きる多様な動物相が豊かで、人生で初めての触れあいをいたく感激できた毎日でした。カエルアンコウのよちよち歩きと疑

似餌での餌釣りに目くるめいたり、一体何の仲間なのか謎だったウミエラ類の観察、巣穴に塩を入れるとマテガイが直ぐに飛び出して捕まえたり……。

こうして数々の生物活動で満ち溢れる南国の海にあこがれが生じました。その延長として、多様な海洋生物が生息する、美しい海に面した南紀白浜の瀬戸臨海実験所で、これまでの26年間の研究教育生活を実践できたことに感謝しております。つい先だって、野田善郎先生が生殖生物学を学んだハワイ大学の柳町隆造先生が瀬戸臨海実験所にフクロムシ類の生物学的研究で来所され、野田先生のことを一緒に懐かしく思い出しました。

愛媛大学理学部には当時は大学院がまだ設置されていなかったの、伊藤猛夫先生のお勧めもあって、卒業後は北海道大学理学研究科へと進み、博士課程を終え、助手・講師と勤めて、京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所（柳澤康信元愛媛大学学長の大学院時代の学び舎）へ転任致しました。ここをもうすぐ退職なのですが、4月からは、同じ和歌山県白浜町に所在する「ベニクラゲ若返り・再生生物科学研究所—白浜海洋生物実験体験館」（現在、鋭意創設中）の所長として教育研究を続行し、地域貢献はもとより世界貢献へと邁進する所存です。どうぞ宜しくお願い致します。（2018年2月26日）



生物学科の同級生（3名欠席）